

## 57 『南冥問答』にみる「嘔」について

小曾戸 明子

日の出ヶ丘病院

亀井南冥は、寛保三年（一七四三年）筑前国早良郡姪浜村（現福岡市西区）で生まれ、儒医として高名である。小石元俊・小田亨叔と共に永富独嘯庵門下の三傑といわれる。

『南冥問答』は『古今齋以呂波歌』と並んで、南冥の医に関する著述の代表的なものである。今回用いたものは、大塚敬節・矢数道明責任編集の近世漢方医学書集成一四（名著出版）に収められているもので、底本は大塚敬節所蔵の版本で、冒頭に漢文の附言が四頁あり、本文は、暴瀉と題され、或問テ曰ではじまる段落がおよそ十六あり、五十五頁にわたる片仮名まじり文である。末尾に書林とあり、十一ヶ所（京都一、江戸八、大阪二）の住所と名称が記されている。附言の末尾に安永己亥初夏と記されているので、一七七九年、

南冥三十七歳の頃のものであることがわかる。すでにその前年福岡藩に一介の町医から儒医を兼ねて抜擢され藩主に仕えている。

「暴瀉」と副題にあるように、全編が「今の暴瀉」についての考察で、重ねて種ざまに問答形式で記されている。

「従来慢驚風と名づけて療治を加へ……回復するものあれど百中の一二ていど希なり……参附湯などを用いている内眠るが如くにて皆死する」とあり、薬物の力が届かない「今の暴瀉」について「天行の病」とも「暴瀉の災難」とも記し、その病根については小児期の養育のしかたによる「胃腑の虚耗」「胃腑の不丈夫」を指摘し、田舎流に育てることが大切だと説明している。表現は具体的であるが、その実際は、「微細の吟味に及ばぬことなり」と明言し、「嘔」という古来からの工夫・術は、赤子の脾胃の気を後年に至って丈夫になるようにとして始めるのだが、その「嘔」の仕形が一定でなく記録がまちまちに違う。その訳は「人には皆稟賦とて天より受けたる質に強弱ありて多く嘔して良き

もあり少く哺してよきもあり早晚も其通りにて得とは誰も知ぬこと」「何程微細に吟味しても稟賦の強弱必竟推察なれば無益の念なり」「親の子を大切におもふは天道の自然にてわりなきものなれば大学にも赤子を保つが如く心誠にこれを求むれば中らずといへども遠からずと云へり」と、養育について「無益の念を入れる」ことはかえつて脾胃不丈夫なる子供にしてしまふと答えている。重ねて「小児を田舎流育てること」を説き、「天然にまかせ置て」「随分疎略に育てることなり」という。

田舎の小児は胃氣丈夫なので存分に食べても腹痛や瀉下するくらいで薬も用いないが死亡に至らず、暴瀉とは名付けずただ食傷か霍乱かなどと言うくらいで恐れるものとならない。「危くもあれど又気味もよし」といった育て方に言及している。

「哺」とは、口中に食べ物をふくむ、又親鳥が口にふくんだえさを子に与える、はぐくみ養うこと。

亀井は、哺は胃氣を丈夫にする術、と言ひ、分に応じ哺食すべし、とも言う。「分」とは何か？ 個性を重

んじその時々々の気分・体調の変化に臨機応変に食べることを通じて育てていく、より精神的野性的な意気に通じるまなざしがある、と考えられる。

全編に小児を論じてはいるが、療治の例では老人小児と並べて言及していたり、食物については老人について述べており、学者・書物にも厳しく「道を知ざる者の無益の念を入却て害を生ずること」とも述べ、亀井にとつての医術・学問が「道」と分かちがたくあることがわかる。